

七 関東大震災前後

総同盟事務所襲撃

山鹿は帰宅するや否や、何くわぬ顔で働きました。しばらく家をあけていた上に、長女アイノが生まれていろいろ費用がいった。昼間凸版印刷の欧文植字工として勤め、夕刻からは信友会の事務所に顔出しするのが日課であった。

事務所には、いつも誰かがつめかけていて、ストや紛争が起るとすぐ応援に飛び出したが、山鹿は夜はどんなに遅くなっても帰って、翌日は普通の勤めをきっちりやるので定評があった。

ストの応援にからんで、総同盟とはげしい対立抗争を続けたものこの頃である。一九二三年（大正十二年）六月、錦糸堀の汽車会社東京工場で「関東車輻組合」がアナ系の自由連合派諸組合の応援のもとにストに入った。ストは七月一日まで続いたが、総同盟は南葛労働組合と共に御用組合「親睦会」を助け、スト破りを行った。

自連派はこのスト破りの本拠総同盟関東鉄工組合本所支部を「断平叩いて制裁を加える要あり」と

決定した。

六月末の夕刻、吾妻橋のピヤホールに五〇余人が結集、行動のかけひきは印刷工の桑原練太郎で、彼の合図にみなが従うことをきめた。桑原が右腕をあげるのを潮に、一同外へ出た。先頭は、布留川桂と山鹿である。山鹿は動作が機敏で逃げるのが早く、すぐ姿をくらます名人であった。二丁程先を曲った、左側の二階建ての総同盟の看板がでていいる事務所が目標である。早速でそのまま走ってみんな無言のまま突入した。出てきた男との問答ももどかしく、一同土足のままなだれこみ、電話をかけたようとしている男を突きとばし受話機をもぎとる。二階へドカドカ駆け上がった。一瞬間に荒らすだけ荒ら裏切り者」と殴り踏みつける。壁の掲示板をはずし、帳簿をちぎり、あっとい間に荒らすだけ荒らした。「ずらかれ」の桑原の合図で、一瞬にしてみんな一人残らず消え失せた。「総同盟は器物破壊で訴えたが、犯人の名前が一人もわからず、警視庁も取り上げなかった。その時の戦利品電話器一箇は山鹿無電研究所の受納となった……。」

大杉虐殺と海外通信

七月の初め頃、不逞社を作っていた朴烈が、ひそかに山鹿を訪ねて来たことがある。声をひそめての話は、いきなり「上海でコレ(パチンコ)とコレ(バクダン)を買うことはできないか」という身ぶりでの相談であった。それほど容易ではない、という山鹿の答えにありありと失望の色をみせて、帰っていった。また七月の中旬には大杉がパリから強制送還されて帰国した。帰る早々の大杉は忙しいので、山鹿は二度ばかり出会っただけであった。

と、あの関東大震災が起こった。朴烈が保護検束されたのを発端に、大逆事件をデッチ上げられ、大杉は憲兵大尉甘粕のために虐殺され、以来この二人の姿を山鹿は永遠に見ることができなくなりましたのである。震災によって、同志の殆んどは保護検束されていた。また行先も不明となって連絡がとだえ、組合事務所もほとんどが焼け出された。山鹿は本郷の隠れ家が危なくなったので、千住に引越した。貧民窟の長屋でにわか大工に化けた。生来器用な彼は、バラックを建てる手伝いはこなせ、結構大工としても通用した。

千住へ移った翌日、信友会の鈴木重治が顔色をかえて飛び込んできた。「大杉と野枝と甥の橋宗一の三人が殺された！」山鹿はすぐにペンを取った。これを直ちに各国の同志に知らせねばならぬ。日本政府と軍部への抗議を国外から集中させることが、まず最初の葬らい合戦だ。早速、その夜から海外通信が死物狂いで始まった。

大杉虐殺事件のニュースは、こうしてアメリカのIWW機関紙をはじめとして各国の諸新聞に取りあげられることになった。なかでもパリのアナキスト連盟発行「リベルテール」は、「殺人鬼甘粕」の見出しで彼の写真を載せ、一同志は「もし甘粕が国外亡命でフランスへ来るなら、復讐はおれ達で引き受ける」と言ってきた。またこの甘粕事件については、共産側のためにする悪質なデマが海外に流された。例えば第四次「労働運動」四号には、次のような記事が掲げられている。

——パリの「アンチナショナリスト」という仏文の共産党機関紙の三月号に「極東より」という見出しで、僕の名でにせの報告が掲載されている。それは、「共産主義の有名な理論家でもまた才能ある著述家でもあり、全世界から尊敬をうけているサカイという男が、監獄から逃走を試みて

統殺された」と書き、そのあとへ「サンジカリストで古いエスペランチスト大杉も家族と共に殺された」とつけ加え、なお続いて日本と支那のエスペラント運動のデータラメが並べてある。その文章の原文はエス文で、日付は昨年一月七日に京都から出したことになっている。しかし、俺は去年の一月七日なんて日は、京都になんかない。その月一六日の大杉等の葬儀の準備で多忙だった……。(山鹿)

また、延島英一も次のように語っている。

—— 共産党はサカエ・オスキのまぎらわしい名を奇貨とし、共産党のサカイが殺されたとモスコウに報告した。モスコウはまた麗々しく追悼文までこさえて世界に発表したものだ。ところが同志の真相発表によって、殺されたのが大杉、平沢君らであった事が、全世界に知れ渡った。驚いたのは共産党。何とかしてこの辻褄をあわせねばならない。そこで発明したのは、大杉スパイ説だ。フランス共産党サンジカリスト機関誌「ラヴィ・ヴウリエ」に、「大杉は日本政府の手先で、労働運動に首を突っ込んでいた。彼はつい先ごろパリへやってきたが、そこにいる間、日本政府を裏切った。地震のちょっと前に、彼は日本へ帰った。疑いもなく日本政府をして、大杉を殺さしめるに到った動機は、それに対する返報であったのだ」と。

山鹿が送った真相は、フランス、ドイツ、スエーデン、イギリス、ノルウェー、オランダ、スペイン、ポルトガル、スイス、イタリー、アメリカ、メキシコ、南米諸国の同志に波紋を巻き起こし、共産党のデマを粉碎したばかりでなく、日本の大使館やボル派をあわてさせた。その一方、被災した日本人民への同情と連帯を大きく呼び起こす力ともなった。そして九月も末になると関東大震災の惨状

は世界に広く知れわたり、各国から救援物資が続々到着するようになった。

—— ミルクやハム、バターが無料で配給された。山盛りのカレーライスが一皿五銭で、到るところのテント張りで食べられたりした。ところが政府が、警官を通じて配給したのは玄米の握り飯だけだった。全国から送られた古着は、三カ月もたってカビが生えてから配られるという始末だった。この玄米の握り飯で、消化不良と赤痢が蔓延した。通信連絡がようやく一段落したころ、おかげで私も赤痢にかかって、一ヶ月あまりひどい目にあった。

骨箱とピストル

赤痢がなおって、山鹿が久しぶりに駒込の労働運動社を訪ねると、震災以前の顔が大分そろっていた。大杉の葬儀をやることで四散した勢力をまとめ、新しい闘いを進めようという相談がまとまっていた。そして一二月一六日は、自由連合系労働組合および思想団体の合同葬儀を、谷中斎場で行うことが決まった。

当日の朝七時半頃、労働運動社で事件がもちあがった。後でわかったのだが、右翼の大化会に属する男が、焼香客を装ってやって来た。そしてやにわに大杉の骨箱を奪うと、ピストルを乱発しながら逃げ出したのである。すわ！ とばかり立ち上がった連中が、追いかけて捕まえ、ピストルを取り上げ袋叩きにした。しかし、他のもう一人の男が骨箱を受け取って、待たせていた自動車ですばやく逃げだしてしまっただけである。

—— その男の言い分は、「無政府主義者が、宗教的儀式をやるとは何事か」というのであった。そ

れはもっともな話で、われわれは儀式をやる気は少しもなかった。だから骨は、室の棚に置いてあって、皆背中をむけて飯をくっている間に、盗まれたのである。もともと葬儀は、示威運動のつもりであった。骨なしがかえって意気をあおり、集まった連中は盛んな行進をやって、谷中斎場は大演説会に化した。

この時男が発射したピストルは、大阪から上京していた萩原貞一が、熱く灼けた銃身を握って奪い取った。(そのために彼は、手のひらを火傷して、しばらく白い包帯をしていた。)それを、一はやく山鹿が受け取って隠した。大杉の骨箱は、数日後警視庁に届けられて戻ってきたが、ピストルは、警察の必死の詮議にもかかわらず、どうしても出てこなかったのである。

第四次「労働運動」

大杉の帰国後すぐ企画されていた『労働運動』の再刊は、震災につぐ検束などで頓座していたが、一九二三年一二月、ようやく刊行されることとなった。これが第四次『労働運動』である。同人は和田久太郎、村木源次郎、山鹿泰治、岩佐作太郎、近藤憲二、水沼辰夫、和田栄太郎、そして本郷の労働運動社には、村木、和田久、近藤の外に延島英一、川口慶助が住み込んで、発行の仕事にあたった。山鹿は、もっぱら海外から送られてくるエス文紙からの情報や論文などの記事を入れる役割を受けもった。また第三号からは、付録でエスペラント欄をもうけ、第九号からは本紙の中にエス文で、その号の内容目次と要項を載せ続けた。第三次までの労働運動に比べて、第四次の各号に国際記事が目立つのは、もっぱら山鹿の仕事であった。

その山鹿は他方では、米系の英字日刊新聞ジャパンアドバタイザー社に勤めて、毎日三里の焼跡の道を歩いて通っていた。

——アドバタイザー社は、欧文植字工にとっては、心地のよい仕事場だった。それでも争議は、ちょいちょい起こした。ここは、年末賞与がなかった。社長室におしかけて、「借金で年が越せない。何とかしてくれ」と問答したが、アメリカ流でダメである。誰かが思いついて、「アメリカなら、クリスマスプレゼントというのがあるだろう。それをくれ」と交渉すると、「OKプレゼントならよろしい」というようなことだった。解雇の復職要求や、一方的に日曜休刊を年中無休にした時など、組版をつぶして発行不能にしたり、相当あばれたものであった。

このアドバタイザー社は、はじめ手組みで活字を組んでいたが、ライノタイプが数台はいってきた。この自動式だと六倍も早く組め、各行が一本のかたまりのようになって鑄造される。これを使いこなす熟練工が追々に出て来て、高給の欧文工がさらによい給料がとれて「労働貴族」といわれる程であった。私はすぐ熟練して、メーカーカップマン(大組工)になった。毎夜十二時が、ラストニュースで、いつも午前の帰宅であった。

しかし、その忙しいなかでも、山鹿はこまめな活動をやめなかった。例えば、後藤謙太郎が獄中縊死した時、また村木源次郎が死んで、二人の合同葬儀が行われた時、そして処刑された古田大次郎の遺体引き取りの時も、いつも世話をやく彼の姿が、見られないことはなかった。

泰山鳴動、ブリキ罐の中味

関東大震災の一周年目にあたる一九二四年(大正十三年)九月一日に、和田久は大杉等三人を憲兵廿柏に虐殺させた張本人福田大将を狙撃して捕われた。

——数日後の朝まだき、表戸が突然手荒く叩かれてしなり出したとたん、戸を蹴破って十数人の決死隊がとび込んで来た。拳銃を擬している奴もいる。一瞬蚊帳の吊手がちぎられ、投網にかかったように押えこまれた。半身を起こした僕に、猛獣のように襲いかかってねじふせる。妻が「子供が寝てる」と悲鳴をあげなかったら、赤ん坊は踏み殺されるところだった。両手に一人ずつかじりついたまま、外へ引きずり出されると、しゃにむに千住の土手に待っていた自動車に押し込まれた。ちょっと落ち着いたので「中々大がかりだね」と皮肉った。「フウン、イヤに落ち着いているネ。さてはもう匿した後か?」と、さすがお察しは当たっていた。

自動車が警視庁に着くと、新聞写真班がひしめいていた。その邪魔をするのがまた奴等の大骨折りだった。朝飯の官給弁当を食べて、ケロリとしていると、人相の悪いのが沢山入って「お前か、山鹿は」などと行って、又出て行く。「貴様のおかげで俺達は三晩も徹夜で駆け廻ったのだ。今度はいつもの調子の、知らん忘れたでは済まないんだぞ」そんな御託を聞いている間に、千住の長屋は泰山鳴動の騒ぎだったらしい。畳をめくり、天井板を外し、縁の下の奥からそれとおぼしき円筒形の物体をみつけどす。おそろおそろ引き出してみたら、古電池であった。箆筒の底の、妻がはずかしがってかくそうとするブリキ罐を奪いとって開いてみたら、月経帯が入れてあ

ったり、爆弾ならぬ爆笑の種ばかり。特に、屋根に張った電線と、ラジオの箱は彼らの恐怖の的となった。(これは少し前、中浜哲がやってきた時——彼はもと中野電信隊にいたので知識があった——大変感心して帰った私の自慢の試作品だった)その頃東京で、ラジオの試作放送が始まった時で、許可をとれば聴取できることになっていた。直ちに申し込んだら百何号かの許可書が来て、屋根の上にアンテナを張り、時々聞いていたのである。妻の説明ではわけがわからぬようだったが、逋信省の許可書が箱に貼りつけてあったので、文句のつけようがない。結局狭い棟割り長屋を夕方までかかって、くもの巣だらけになっただけで、奴らの希みの品は何一つ見当らなかつた。従って警視庁に於ける僕の取調べも一向進捗せず、「まあいいや、当分泊まって行け」と言ってブタ箱へ放り込んだ。

「コレは和田、古田らとメンを見知っておりますから、別房へ収容ねがいます」との申し送り。ほくは京都から出獄以来三年間、この時初めて発見されたのであった。その間、大杉らの葬儀のとき暴れこんで来た奴から奪ったコルト八連発や、岩鼻火薬庫の梅印のダイナマイトと口火雷管などの風呂敷包みなんぞ、物騒きわまる代物がゴロゴロと、ついその数日前までは千住の長屋に転がっていたのだ。時間というのはこういう時は便利なものである。うっかりすると命取りになるところだが、時間がすぎるともう現物は遠く越後の山奥に運び出されてしまっている——となれば、いくら疑わしくても二九日の拘留より奴等には手がなかった。

とうとう二九日過ぎに出された。しかし、もう千住の隠れ家には住めないで、引越して大森の戸越に移った。